「屋根のない学校」で磨く！地域と世界の課題解決力

世界の課題解決にむけて、みんなが考え、行動することをねらいとする開発教育ですが、地域活動をどのように開発教育につなげられるのでしょうか？ユネスコスクール加盟校、大田区立大森第六中学校の実践について、柴崎裕子先生にお話を聞きました。地域活動をする際の参考にしてみてください。

柴崎 裕子 教諭

平成 14 年度から大田区立大森第六中学校に赴任。研究主任として活動を推進している。同校は、22 年度より ESD を開始、農援隊を結成。23 年にユネスコスクールに加盟し、28 年度よりサステイナブル・スクールに認定。

Q：地域と世界をつなげる取り組みについて教えてください。

はじめから世界を意識したわけではないのです。学校の近所に池があったので「ホタルも棲める環境を！」と、この池にホタルを復活させる環境教育として始めました。その他、防災訓練や、生徒たちが地域の危険な個所などを点検して地域にマップを発信する「まちなか点検」、植樹活動など、年間を通して地域での活動に取り組んでいます。

そもそもは学校を良くしたい、という思いで活動を始めましたが、「地域は屋根のない学校」という小澤紀美子先生（東京学芸大学）の言葉と出会ってから、地域における課題解決型の学びを意識しながら取り組んでいます。

洗足池での活動

Q：世界を意識して始めたわけではないのですね。地域で得られる「学び」とはどのようなものですか？

いわゆる受験のための学びではなく、本質的な学びができていると思います。具体的には、自分たちで発見して立てた問いや課題を解決していく過程では、なぜこの課題が重要なのか、解決のためには何が必要なのか等を考えるので、社会に出てから必要な「正解が一つではない問い」への取り組み方を学ぶことができます。また、情報を暗記するのではなく情報を活用する力が身につくと、受け身の姿勢から主体的な学びに変わります。さらに、自分たちの地域を自分たちでケアするという地域創生的な考えも芽生えます。このように「地域貢献」「奉仕活動」より「地域で学ぶ」という視点をより意識した課題解決型の地域活動には多くの学びがあると思っています。まさに「屋根のない学校」です。

Q 生徒の目を「世界」に向けるような取り組みはしていますか？

地域活動からスタートした本校の取り組みですが、世界との関わりなしでは生きていけない今日、地域活動だけでは生徒たちの世界観の広がりに限界があるので、世界にも目を向けさせています。

その際、二つのことに留意しています。まずは自文化・自己理解です。世界とかかわるうえで自文化理解は大切なスタート地点だと考えています。ユネスコスクールとして海外から来校者を積極的に受け入れたり、海外の学校に日本文化を発信したりする中で、自分や自文化への理解を深めています。次に、世界の課題と自分たちをつなげることも意識しました。

Q：世界の課題とつなげる工夫や生徒の反応を教えてください。

世界の課題とつなげる工夫を考えたのですが、なんと生徒のほうから「あ、自分たちが取り組んでいる地域の課題と同じものが世界にもある！」と。本校では、年間計画に沿って進める教科横断的課題解決型学習の中で、全教員が SDGs に言及するようにしています。SDGs は難しそうだし生徒に受け入れられるかという心配もあったのですが、地域を起点にして、すんなり SDGs を受け入れられました。これにより、自分たちがしている環境保護や防災の取り組みなどの地域における課題解決活動が、世界の課題解決にもつながっていると感じているようです。地域での活動をしてきたからこそ、世界の課題を自分たちとつなげることができたと考えています。

海外の先生と世界の課題について話すときも、課題解決型の地域活動という基盤があるので、世界と自分たちをリンクできる

Q：地域は世界の縮図と言われる所以でしょうか。これから地域活動を始めようとする先生方に、アドバイスをお願いします。

イチオシは防災訓練です。どこの学校でもやりますし、地域の人に来てもらいやすいので、地域とつながる大きな一歩になります。さらに SDGs の目標 11「住み続けられるまちづくりを」と関連づけることもできます。本校では防災訓練に地域の人を招き、生徒が中心となり、炊き出し、けが人運搬、トイレ設置、情報などの班をつくり活動していますが、その中で地域との関係が深まり、様々な地域活動のアイディアに発展しました。今では地域活動が地域住民と生徒たちに定着し、学校の伝統のようになっているので、教員が異動しても活動は続くはずです。